

中国伝統医学と道教（第29回 甲骨文）

吉元 昭治

吉元医院

甲骨文字は漢字の祖字である。その起源は（殷、商 前16世紀、湯王が夏を滅ぼし建国。第22代武丁の頃より甲骨文が現われる。前11世紀紂王の時、周武王により滅ぶ、殷周革命）周（西周と平王以後の東周に分けられる）春秋時代（前8世紀の7-80年間）の約600年間（金文も）つづいたが清朝末まで地中において姿を消していた。その発見の端緒に光緒二十五年（1899）、北京の国子監癸酒（国立大学総長）であった王懿榮が病気になり漢方薬店より龍骨（骨の化石）を求めたところその表面に文字らしきものを見た。そこでその出どころを探ると河南省安陽県小屯村付近と分かった。鋭意その収集に務めたがその翌年、義和団事件にふれ自殺してしまう。当時食客として居合わせた劉鶚（鉄雲）はその意志をつぎ、文字の分類・整理を重ね『鉄雲藏龜』（1903）を出版した。その後の研究は羅振玉・王国祖・蔡作賓・郭沫若らがつぎ、我が国でも貝塚茂樹・島邦男・加藤常賢・白川静氏などが著名である。

甲骨文は全て解読されているわけではなく、絵文字、象形文字で意味的記号のみならず、表音・仮借（音や意味をもつ文字を併せて新しい抽象的、否定的な意味の文字をつくる）、つまり形・音・義の文字として立派な三要素をもっている。

その甲骨文のもつ内容は王及びその一族に関する占いで庶民に関するものは伝わっていない。その占いは祭祀・征伐・狩猟・旅行・農耕・天候・病気・妊娠や分娩・毎夜、10日毎の吉凶を貞人（占いを職とする一団）か甲骨文とした。その吉凶を降すものは、天の神（最高神）・自然神・祖先神・天候などであった。

その甲骨文の記し方には一定の順序があり①前辞（干支ト某貞、貞人の名を記す）②命辞（何について、貞う内容）③繇辞（現われるト兆について吉凶を判断する）④驗辞（その判断の結果何が起きたか、その後の事実と一致していたか）⑤記辞（月日、場所を示す部分）という組み方からなっているが省略されることも多い。その祟りを防ぐため大規模な祭祀を行なった。人身犠牲や動物奉納である。天つ神や祖先を祀るのは宗教の始まりであり、疾病に関する占い、およびその対処のしかたは医学の濫觴ともいえる。そこに天人合一の思想が芽生えてくれば後の道教や中国医学に関わる部分を容易に見つけられる。甲骨文字と医学の関係文献としては、①『殷契微瑩』（敵一萍、1951）②『殷人疾病考』（胡厚宣、1972）③『文字源流考』（庚殷輝、1979）④『殷墟卜辞研究—科学技術編』（温少峰・他、1983）⑤『殷商甲骨卜辞所見之巫術』（趙容俊、2003）⑥『甲骨文医学資料、釋文考辨与研究』（彭邦炯、2008）があり、これらの多くは孔版あるいは筆文である。

甲骨文を知ることには漢字の歴史（甲骨文、金文→篆・隸書→楷・行・草書→近代では、繁体・簡体・日本の常用漢字）の流れを知るだけでなく一字一義に秘められた漢字の意味を理解するのに有効な方法と思われる。

漢字が数千年もの命をもっているのは実に中国文明が連続して存在したからで、東アジアで漢字圏という一つの世界をつくり今日に到っている。エジプト・アッシリア・マヤその他の古代文字はその文明の崩壊と運命を共にしている。

総会ではテーマに沿った部分についてのべる。